

- JA福光は、米需要量の減少に対応し、アスパラガスやブロッコリーなどの産地化に取り組むも、収穫、調製が手作業で労力を要する理由から拡大せず。
新たに機械化一貫体系が確立されているにんじんの産地化に取り組む。
- 園芸作物栽培の経験が少ない生産者でも安定した収量が確保できるよう、栽培マニュアル配布や研修会開催により技術ポイントを周知。またJAが洗浄選別機等を導入し、現地調製により効率化を図った。
- その結果、面積は年々増加、品質も県内トップとなり、栽培技術が定着。

具体的な成果

1 栽培技術の習得

- ポイント技術である排水対策とは種後の灌水管理が徹底されたことで、品質の向上が図られ、A品率は県内トップ(R2年: JA福光67%、県内39%)となった。
- 農地整備事業では、効率的に排水されるよう、排水口や排水路が施工。



【農地整備担当者とのほ場巡回】



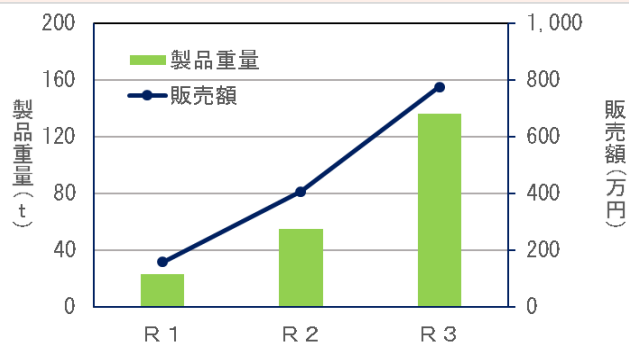
【園芸品目栽培に適した排水路が整備】

2 生産体制の構築

- JAで、機械や施設が整備され、は種から選果までの全工程を福光管内で完結できる体制を構築。経営体数の増加、面積の拡大に伴い、製品重量や販売額も増加。
(R元年 → R3年)

経営体数 4 → 15

栽培面積 1.4ha → 6.6ha



普及指導員の活動

1 栽培技術の習得

- 地域の栽培技術に応じた「栽培マニュアル」を全生産者に配布するとともに、各研修会で周知。



- 排水対策研修会の実施と各ほ場の排水対策施工(案)を生産者に提示。
- 農地整備担当を始めとした関係機関と排水口や排水路の高さ等を情報共有。
- 適切なは種管理や灌水管理の現地指導。

2 生産体制の構築

- は種機や収穫機、洗浄選別機の導入を支援。
- 洗浄選別作業の効率化等に向け随時改善を実施。

普及指導員だからできたこと

- ・ 農業者が主穀作経営体中心の中で、機械化一貫体系が確立されているにんじんに着目し、試作実証等により農業者や関係機関を巻き込んだ産地化に取り組んだ。
- ・ 産地規模の拡大に応じ、JA等関係機関に働きかけ、事業を活用した機械化の支援を行うほか、いち早く取組みの制限要因を分析し、その解決に取り組むなど産地化を支援した。

「にんじん」の新たな産地づくり

～福光の水田で二刀流に挑戦！～

1 対象の概要

JA 福光は、米需要量の減少に対応し、水稻に特化した営農体制からの脱却を図るため、平成 22 年から開始された県の 1 億円産地づくり事業で「アスパラガス」と「ブロッコリー」を戦略品目に選定し、積極的な普及を図ってきた。

しかし、いずれの品目も手作業による収穫のため、面積拡大に至らなかった。更なる生産調整が求められる中、主穀作経営体が水田で大規模に生産できる高収益作物を模索した結果、機械化一貫体系が確立されており、県全体としても広域産地化を目指している「にんじん」に着目し、試作期間を経て、令和 2 年 3 月に「福光にんじん生産出荷組合」が設立された。

2 普及活動の課題・目標

(1) 栽培技術の習得

生産者の大半が、園芸作物の経験が浅いことから、にんじん栽培のためのほ場準備から収穫までの一連の作業について基礎的な技術習得が必要であった。

ア 排水対策

福光地域の水田は、粘質な土壌である上、排水口や水路が高いほ場が多く、試作段階では、排水不良による湿害が発生し（写真 1）、排水対策が不可欠であった。

イ は種後のかん水管理

にんじん栽培では株立率の向上が重要だが、は種時期が 7 月下旬～8 月の高温乾燥期となるため、は種後の灌水管理が不可欠である。そこで、スプリンクラー灌水による株立率の向上を目指した。



写真 1 排水不良ほ場での
にんじんの作付け

(2) 生産体制の整備

令和元年までは、全農から収穫機をレンタルし、収穫したにんじんを選果のため車で片道約 1 時間以上かけ、JA 全農とやま野菜センター（富山市吉岡）へ持ち込んでいた。しかし、このような体制では生産者や JA 福光の負担が大きく、非効率で面積拡大にも限界があったため、一連の作業の機械化と選果場の整備が急務であった。

3 普及活動の内容

(1) 栽培技術の習得

新規生産者でも安定した収量が確保できるよう、福光の栽培状況に応じた「福光地域版にんじん栽培マニュアル」を作成し、全生産者に配布するとともに各研修会で周知する等、指導の礎とした。

また、作業毎の研修会を開催するとともに作業時には立ち合い、灌水管理等きめ細かな栽培技術指導を行った（写真 2）。加えて、JA 営農指導員と月 2 回の全戸調査を行い、生育や病虫害発生状況に迅速に対応できる指導体制を構築した。

ア 排水対策

は種前には、排水対策に特化した研修会を毎年開催する他、にんじん栽培予定ほ場の排水状況を確認した上で、各ほ場に対応した具体的な排水対策施工（案）を提示した（写真 3）。



写真 2 は種実演会



写真 3 排水対策研修会

更に、排水対策をより実効性のあるものとするため、当センターの農地整備事業担当を始め、関係機関と共には場巡回を行い、排水口や排水路の高さ等について情報共有を図った。

イ は種後の灌水管理

適切なは種管理や全生産者は場でのスプリンクラーによる灌水管理を徹底した。

(2) 生産体制の構築

は種から選果までの全ての工程を福光地域で完結させるため、国や県の事業を活用し、は種機や収穫機、洗浄選別機の導入を支援した。

また、洗浄選別作業が円滑に行われるよう、JA 営農指導員と共に県内の既存選果場を視察し、作業の効率化等に向け、随時改善を行った。

4 普及活動の成果

(1) 栽培技術の習得

指導の結果、品質が向上し、令和2年度のA品率は県内でトップとなり、栽培技術が着実に定着してきている（図1）。

生産者の排水対策に対する意識が短期間で格段に向上し、生産者自ら排水良好なほ場の選定及び排水対策施工を行うようになった。また、農地整備事業では、効率的に排水されるよう、排水口や排水路が施工された。

灌水管理の徹底により、令和2～3年度の株立率は県平均を上回り、70%以上に向上した（図1）。

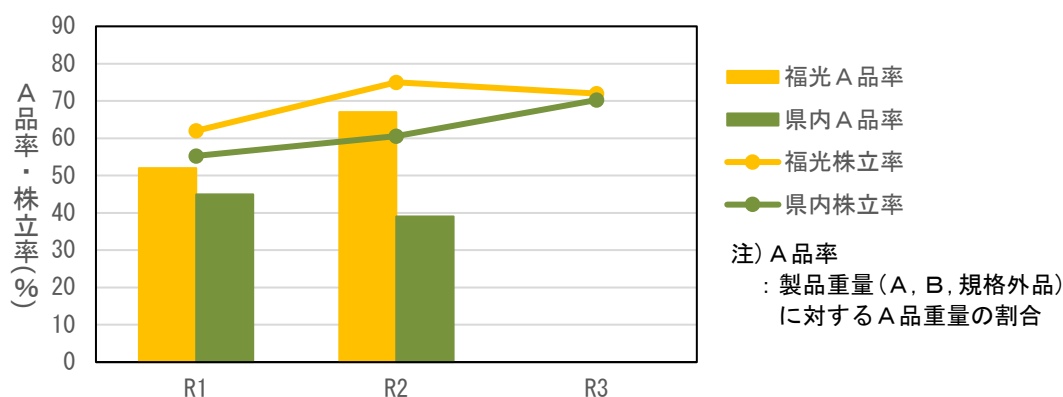


図1 A品率・株立率の推移

(2) 生産体制の構築

令和元～3年にかけて、機械や施設が整備されたことにより、全ての工程をJA福光管内で完結できる体制が構築された。その結果、生産者やJA営農指導員の運搬にかかる負担が大幅に軽減され、経営体数や栽培面積が拡大している（表1）。

表1 JA福光管内のにんじんの生産の推移

年度	経営体数	栽培面積 (ha)	製品重量 (t)	販売額 (千円)	導入された機械・施設等
R元	4	1.4	23	1,566	は種機1台
R2	7	3.3	55	4,061	収穫機1台、洗浄選別機
R3	15	6.6	136	7,758	は種機1台、収穫機1台

5 今後の普及活動に向けて

福光の水田でのにんじんを始めてからまだ数年であるが、年ごとに新たな栽培上の課題が表面化してきた。

「福光にんじん生産出荷組合」ではGAPの取組みも始めており、今後も一年一年の経験をしっかりと産地の財産として残し、技術の継承と持続的な産地の発展に役立てるような普及活動に努めていきたい。